

「朝川渡る」試解

A Note about the meaning of Manyosyu Poem #116 "Asakawa Wataru"

小島 恵子

Keiko Kojima

万葉集巻二に収められている但馬の皇女の三首の相聞歌は、逆境にあつて恋を貰いた女性の歌として有名である。この三首は、解釈に難解な語をその中を含み、早くから多くの研究者によつて論じられてきた。ここでは、三首目一一六番歌の「朝川渡る」について考へたい。主として歌中のいくつかの言葉を手がかりとしてこの句と一首全体の解釈を試みる。

但馬皇女、高市皇子の宮に在す時に、穂積皇子を思ひて作らず歌一首

秋の田の 穂向きの寄れる 片寄りに 君に寄りなな 言痛くありとも (一一四)

穂積皇子に勅して、近江の志賀の山寺に遣はす時に、但馬皇女の作らず歌一首

後れ居て 恋ひつつあらずは 追ひ及かむ 道の隈廻に 標結へ我が背 (一一五)

但馬皇女、高市皇子の宮に在す時に、竊かに穂積皇子に接ひ、事既に形はれて作らず歌一首

人言を 繁み言痛み 己が世に いまだ渡らぬ 朝川渡る (一一六)^①

一 これまでの解釈

第三首、一一六番歌の「朝川渡る」については、さまざまな解釈が施されてきた。それについて、まず概観する。

(1) 古今二、人目ツツミノ高ケレハ川トミナカラトヨミ、マタキナキ名ノ立田川渡ラテヤマム物ナラナクニナトヨメル、皆男女ノ中ヲ川ニ喩へ、ナラヌヲハ渡ラヌニ喩へ、成ヲハ渡ルニ喩フ。然レハ僅ニ逢トイヘトモ、妹背ト云ハカリニモアラヌ墓ナキ事ニヨリ、マタ渡ラヌ川ヲ既ニ渡レリトイハムヤウニ云サハカルルカ侘シキ事、ト譬テ読セタマヘルナリ。朝川渡ハ速クヨリ事ノ成ヤウノ意ナリ。(契沖『万葉代匠記(精)』)

(2) : 河を渡るを男女の逢ことに譬たる多ければ、ここもおのが世にはじめたるいもせの道なるに、人言によりて中たえ行は、よにも浅き吾中かなとなけき給ふよしなるべし、かかれば朝は浅の意なり、又あらわれしにつけて、朝明に道行給ふよし有て、皇女のなれぬわびしき事にあひ給ふをのたまふか、…(賀茂真

淵『万葉考』

(3) 此句今日迄知らぬ世のうき瀬を渡りて潔身(ミソギ)し給ふよしなるべし。(橘守部『檜婦手』)

(4) 『万葉考』の後の「又あらはれしにつけて、…」以下の説をよしとして) 以前より通じ居給ひけんが、事あらはれていひさわがるる人言の繁さに、甚しさに、君がわたりゆきけん川を、おのれもわたれり。おのれは女の事なれば、かかる事は世になれず。いまだ川などをわたりし事もなきに、しかも朝とく川をわたる事よとのたまふにて、事あらはれしかば、穗積皇子の、何方にかうつりたまひけん。それを追て、川をもわたりて、ゆきましし事ありしなるべし。(岸本由豆流『万葉集攷証』)

(5) ……ここは苦瀬(ウキセ)に落て、くるしむことのたとへに、宣へるなるべし、朝の詞には、ことに意あるにはあらざるべし(鹿持雅澄『万葉集古義』)

(6) 考に「事あらわれしにつけて、朝明に道行給ふよし有て皇女のなれぬわびしき事にあひ給ふをのたまふか」といへるぞ最穩なる。跡を晦まし給ふ途中の御歌なるべし。(井上通泰『万葉集新考』昭和三年)

(7) この意を考に「事あらわれしにつけて朝明に道行給ふよし有て皇女のなれぬわびしき事にあひ給ふをのたまふか」といへるをよしとす。…蓋し、一時いづれかに身をかくしたまひし折の御歌なるべし。(山田孝雄『万葉集講義』昭和七年)

(8) ……希望は実行に転ずるより外はない。そこで高市皇子の宮を脱け出して、やむことない御身に、いまだ経験せぬ朝川を渡ることとなる。…然しそれ程の苦しさをわびしさの中にありながら、思ふ人の為には聊かもそれを悔とせぬ心持が、言外に強く動いてゐるのは、真剣な恋に直進する人の本當の姿である。(金子元臣『万葉集評釈』昭和十年)

(9) 一生涯これまで一度も経験したことの無い朝川を渡ったというのは、実際の写生で、実質的であるのが人の心を牽く。特に皇女が皇子に逢うために、秘かに朝川を渡ったというように想像すると、なお切実の度が増すわけである。普通女が男の許に通うことは稀だからである。(斎藤茂吉『万葉秀歌』昭和十三年)

(10) 高市皇子の宮から、夜明けに脱出されたことと思われる。…しかしそれをなざる理由は、「人言を繁みこちたみ」ということで、全く身外の、周囲の者によってしいられて、余儀なくさせられることになっている。(窪田空穂『万葉集評釈』昭和十八年)

(11) 人の評判のうるさき、ひどさに、今までの自分の境遇に一度も渡った経験のない朝の川をば渡るので。(…朝早く別れて、川渡りして戻るのは、唯人の間のこと。貴人のせぬ忍んでの早返りをし、川まで渡るといふこと。)(折口信夫『口訳万葉集(改稿)』)

(12) 皇女は高市皇子の宮にあるのであるから、穗積皇子に接するとすれば、穗積皇子の宮か、しかるべき他所に於いてしなればならない。事のあらはれた後ではあるしするので特に他見をばばからねばならぬ。「己が世にいまだ渡りなれぬ朝川」も渡らねばならぬといふものだ。(土屋文明『万葉集私注』昭和二十四年)

(13) 事が現れたのに依って、朝川を渡ることがあったのだろう。(武田祐吉『万葉集全註釈』昭和三十一年)

(14) 人目をさけて朝早く川を渡るといふなれぬことをしたのが、特殊な感動を与えたのであるから、言葉どおりに解しているだろう。皇女自身が逢いに出かけて行ったものと考ええる。(『日本古典文学大系 万葉集』岩波書店 昭和三十三年)

(15) 皇女の身であるが、人目を忍ぶためにまだ夜の明けきらぬ頃

に川を渡られる事があつたと見るべき(澤瀉久孝『万葉集註釈』昭和三十三年)

(16) (第一句、第二句の類型性の説明から) その点から一一六番歌を考えると、「未だ渡らぬ」という第四句が恋人に逢わないといった意味でなくてはならない。ということは「朝川渡る」という第五句が恋人に逢うという内容を含んだ句でなくてはならない……恋人を訪うためにもせよ、恋人と別れて帰るためにもせよ、川を渡るといふのはやはり恋愛の手段の一つであつたと考えない訳にはいかない。(大久間喜一郎「川を渡る女―但馬皇女をめぐる―」『国学院雑誌』六十八巻九号 昭和四十二年七月:『古代文学の構想』所収)

(17) 表面的には、皇女の身で朝の川を渡るといふことを述べた歌にすぎないが、その背後には、密通という危険な未知の世界にあえて足を踏み入れた皇女の行動が寓意として歌い込まれているか。(『日本古典文学全集 万葉集』小学館 昭和四十六年)

(18) 事露れて世間がうるさいので、女の身でありながら未明の川を渡つて逢いに行くという歌。ただし、「川」は恋の障害を象徴し、「川を渡る」のは女が恋の成就を願う行為であるとする考えが古くからある。この歌にも、世間の堰に抵抗して初めての情事を全うするのだという発想が裏にあるのかもしれない。

(『新潮日本古典集成 万葉集』昭和五十一年)

(19) すっかり明けてしまつて日の光もまぶしいほどの朝川を皇女は渡つたのである。女の身で男の許へ通つたというだけでも、尋常ではないのに(茂吉秀歌)、但馬皇女は人目を避けようもない朝の川を渡つて帰つたと歌っている。朝の光に刺すような恥じらいを皇女は感じたかと思われるが、その一方で人目や人言の呪縛をようやく離れえた自分を意識したのではなかつたか。(稲岡耕二『万葉集全注 巻二』昭和六十年)

(20) 皇女にとつての「朝川」はかうして、浅い縁のままに引き裂かれて「渡ら」される運命になつた、「罷り道」にも比すべき「川瀬の道」でもあつたが、さらにはまた、「渡る」は、通常ならば、逢ふに向かつて心を決断することでもあるのに、皇女の場合、またしても皮肉に深刻なことに、遇はぬに向つて決断させられるといふ「渡る」であつた。「瀬」は、人の生における重大な、しばしば苦しい一つの時機でもあり、「渡る」は、通常ならば、みづから決断して乗り切ることであるのに、皇女は、その重大な時機を「人言を繁み言痛み」によつて、決断させられ乗り切らされてゆくことになつたものである。(森重敏『万葉集葉抄』平成四年)

(21) 川を渡るといふことは、止み難い恋の冒険、思い余つて異性と情を通じるといふ寓意が認められる。(『新編日本古典文学全集 万葉集』小学館 平成六年)

(22) 下二句は、皇女たる身分の者にとつてありえない事柄、すなわち、朝早く冷たい川を徒歩で渡るといふような事柄をうたいこめることで、裏に、「自分は世間の堰に抵抗して、生まれて初めての情事を是が非でも全うするのだ」という意味をこめたものと見るべきではないかと思う。(伊藤博『万葉集釈注』平成七年)

(23) 題詞「竊かに……事すでに形はれて」から第一句「人言を繁み言痛み」へと続く流れを辿ると、朝川を渡つて高市皇子の宮に帰ってくるのではなく、皇子の宮を脱け出して行くと理解するほうが自然である。(中略) ここでは、第二首に「追いかむ」と歌われた思いをより発展させた歌と読めるのではない。つまり、皇子を「追つて行つた」と考えるのである。(岡内弘子「但馬皇女御作歌三首」『伊藤博博士古希記念論文集 万葉学藻』平成八年)

(24) 人目を忍んで、朝川を渡らねばならない事情があったのである。窪田『評釈』は、「高市皇子の宮から、夜明けに脱出されてのことと思われる」という。『新日本古典文学大系 万葉集』岩波書店 平成十一年)

(25) 朝川渡る」は、逢瀬の後の帰途のことと解するべきでない。「渡る」はこちらから向こうに渡るニュアンスが強い。つまり、帰って来るのではなくて出かけて行くことを言ったものだ。もつともこれは、現実の経験である以上に、一線を越えて行動に出ってしまった皇女の心情を比喩的に描くものとして機能している。

(身崎寿 一一六番歌解説『セミナー万葉の歌と作品 第十二巻』平成十七年)

(26) ここは男のもとから人目を避けつつ、とはいえ避けようのない明るい朝の光に身をさらしつつ川を渡って帰って来るほかはなかった皇女の辛い思いのうかがわれる表現。(阿蘇瑞枝『万葉集全歌講義』平成十八年)

以上ですべてが概観できたわけではないが、これだけ見ても、「朝川渡る」がいかに多様に解釈されてきたかがわかる。

この「川を渡る」を比喻・寓意と捉える解釈は、上記に挙げたうちでは、(1)『代匠記』、(5)『万葉集古義』、(17)『日本古典文学全集』、(18)『新潮日本古典集成』、(21)『新編日本古典文学全集』、(22)『万葉集釈注』(25)身崎寿「一一六番歌解説」に見られる。(1)

では、川を渡るということは、男女の仲が成ることを言うとして、ここは、まだ川を渡っていない(夫婦になっていない)のに川を渡ったとさわがれてわびしいということだと解し、(5)は、苦しい人生の憂き瀬に落ちることのたとえとする。(17)以降の近現代の解釈では、これを(17)「密通という危険な未知の世界にあえて足を踏み入れた皇女の行動」、(18)「世間の堰に抵抗して初めての情事

を全うするのだという発想」、(25)「一線を越えて行動に出ってしまった皇女の心情」というように、穂積皇子と情を通じたことの比喩的な表現ととっている。

この句を、実際の渡河とする解釈には二通りある。川を渡って高市皇子の宮から他所へ行くとするものと、川を渡って高市皇子の宮に帰って来るとするものである。後者には、(11)『口訳万葉集(改定)』(19)『万葉集全注 卷二』(26)『万葉集全歌講義』がある。『全注』は、「朝」の語の分析から、これが指す時間を明けきった朝の光の差す頃とし、この時間帯に川を渡るのであれば、穂積皇子のもとのからの帰路であるというところから、この解釈に帰結している。

川を渡って向こう側へ行くという解釈はさらに、高市皇子の宮を出て、いずこかへ去るというものと、穂積皇子のもとへ行くというものの二つに分類することができる。前者は、穂積に逢うことができなくなるという解釈で、恋の蹉跌と言えよう。後者は恋の成就を意味する。前者には、(2)『万葉考』、(6)『万葉集新考』、(7)『万葉集講義』、(10)窪田『評釈』、(20)森重敏『万葉集葉抄』があり、後者には(4)『万葉集攷証』、(8)金子『評釈』(9)『万葉秀歌』、(12)『私注』、(14)『日本古典文学大系 万葉集』、(16)大久間喜一郎「川を渡る女―但馬皇女をめぐる―」⁽²⁾、(18)『新潮日本古典集成万葉集』⁽³⁾、(23)岡内弘子「但馬皇女御作歌三首」がある。特に、(4)と(23)では、高市皇子の宮を離れて穂積皇子を追っていったと解し、第二首との整合性もあって説得力に富む。なお、浅見徹「但馬皇女の歌」『セミナー万葉の歌と作品』第三卷 和泉書院)では、この歌が、「渡る」という終止形で終わっているところから、「万葉集の歌の中では、決意表明には助動詞を用いるのが通例であって、裸の終止形が使われる際は、むしろ主体から突き放して客観視したような表現となる。」とし、この「第三首でなお、強い意欲を読みとるべきではなからう。」と説く。

「朝川渡る」は、このように多様な解釈を施されている⁽⁴⁾。しかし全体的に見れば、比喩であれ、実際に渡河したのであれ、その解釈は皇女が恋を全うしたのか、そうでなかったのかに大別できよう。前者であれば、皇女は障害を乗り越えて恋に向かって突き進んでいったのであり、後者であれば、人の言葉を憚り、一時的にせよ恋から遠ざかったことになる。

二 万葉歌の「川渡り」

「川を渡る」ということについては、夙に契沖『代匠記』で「皆男女ノ中ヲ川ニ喩ヘ、ナラヌヲハ渡ラヌニ喩ヘ、成ヲハ渡ルニ喩フ。」と述べていて、真淵『万葉考』も同様の指摘をしている。また、中西進は「川渡り」が、万葉においては恋の類型表現であることを、詩経の類型等から説いており（「水辺の婚」——『万葉集の比較文学的研究』昭和三十八年）、大久間喜一郎（前掲書）は、万葉において「川渡り」ということが、恋の成就への大きな段階となっていた」と論じる。

そこで、万葉歌の「川渡り」を改めて概観してみたい。次に引くのは、「川を渡る」ことを詠み込んだ万葉集歌である。ここでは、「万葉の歌における「川を渡る」を考えるため、「渡る」という言葉が詠み込まれていなくとも、川を渡る行為が表されていれば、例として引いた。

〈挙例1〉万葉集歌における「川を渡る」

- ① …もししきの 大宮人は 船並めて 朝川渡り 船競ひ 夕川渡る …（一・36 幸于吉野宮之時、柿本朝臣人麻呂作歌）
- ② …こもりくの 泊瀬の川に 船浮けて 我が行く川の 川限の八十限落ちず 万度 かへり見しつ …（一・79 或本従藤原京遷于寧樂宮時歌）

- ③ (当該) 人言を 繁み言痛み 己が世に いまだ渡らぬ 朝川渡る (二・116)
- ④ 丹生の川 瀬は渡らずて ゆくゆくと 恋痛し我が背 いで通ひ来ぬ (二・130 長皇子与皇弟御歌一首)
- ⑤ 楽浪の 志賀津の児らが 罷り道の 川瀬の道を 見ればさぶしも (二・218 吉備津采女死時、柿本朝臣人麻呂作歌一首并短歌)
- ⑥ … 富士川と 人の渡るも その山の 水の激ちそ … (三・319 詠不盡山歌一首并短歌)
- ⑦ … 草枕 旅なる間に 佐保川を 朝川渡り 春日野を そがひに見つつ あしひきの 山辺をさして 夕闇と 隠りましぬれ … (三・460 七年乙亥大伴坂上郎女悲嘆尼理願死去作歌一首并短歌)
- ⑧ 佐保川の 小石踏み渡り ぬばたまの 黒馬の来夜は 一年にもあらぬか (四・525 大伴郎女歌四首)
- ⑨ 世の中の 女にしあらば 我が渡る 痛背の川を 渡りかねめや (四・543 紀郎女怨恨歌三首)
- ⑩ 千鳥鳴く 佐保の川門の 清き瀬を 馬打ち渡し いつか通はむ (四・715 大伴宿祢家持贈娘子歌七首)
- ⑪ 狛山に 鳴くほととぎす 泉川 渡りを速み ここに通はず (六・1058 讀久邇新京歌)
- ⑫ さか隈 桜隈川の 瀬を速み 君が手取らば 言寄せむかも (七・1109 詠河)
- ⑬ 湯種蒔く あらきの小田を 求めむと 足結出で濡れぬ この川の瀬に (七・1110 詠河)
- ⑭ 年月も いまだ経なくに 明日香川 瀬々ゆ渡しし 石橋もなし (七・1126 思故郷)
- ⑮ 宇治川を 舟渡せをと 呼ばへども 聞こえずあらし 楫の音

- ①⑥ もせず(七・1138 山背作)
 ①⑦ 武庫川の 水脈を速みと 赤駒の あがく激ちに 濡れにける
 かも(七・1141 攝津作)
 ①⑧ 飛驒人の 真木流すといふ 丹生の川 言は通へど 舟ぞ通は
 ぬ(七・1173 羈旅作)
 ①⑨ 梯立の 倉橋川の 石の橋はも 男盛りに 我が渡してし 石
 の橋はも(七・1283 旋頭歌)
 ①⑩ この川ゆ 舟は行くべく ありといへど 渡り瀬ごとに 守る
 人あり(七・1307 寄川)
 ①⑪ ひさかたの 天の川に 舟浮けて 今夜か君が 我がり来まさ
 む(八・1519 山上臣憶良七夕歌)
 ①⑫ : さ丹塗りの 小舟もがも 玉巻きの ま櫂もがも 朝なぎ
 に いかき渡り 夕潮に い漕ぎ渡り : (八・1520 山上臣
 憶良七夕歌)
 ①⑬ 袖振らば 見も交しつべく 近けども 渡るすべなし 秋にし
 あらねば(八・1525 山上臣憶良七夕歌)
 ①⑭ 彦星し 妻迎へ舟 漕ぎ出らし 天の川原に 霧の立てるは
 (八・1527 山上臣憶良七夕歌)
 ①⑮ 妹がりと 我が行く道の 川しあれば つくめ結ぶと 夜ぞ更
 けにける(八・1546 市原王七夕歌)
 ①⑯ しなでる 片足羽川の さ丹塗りの 大橋の上ゆ 紅の 赤裳
 裾引き 山藍もち 摺れる衣着て ただひとり い渡らす児
 は 若草の 夫かあるらむ 櫃の実の ひとりか寝らむ :
 (九・1742 見河内大橋独去娘子歌一首并短歌)
 ①⑰ 天の川 霧立ち渡る 今日今日と 我が待つ君し 舟出すらし
 も(九・1765 七夕歌一首并短歌)
 ①⑱ 泊瀬川 夕渡り来て 我妹子が 家の金門に 近付きにけり
 (九・1775 献舍人皇子歌)
- ②⑧ 天の川 安の渡りに 舟浮けて 秋立つ待つと 妹に告げこそ
 (十・2000 七夕)
 ②⑨ 大空ゆ 通ふ我すら 汝が故に 天の川道を なづみてぞ来し
 (十・2001 七夕)
 ②⑩ 我が背子に うら恋ひ居れば 天の川 夜舟漕ぐなる 楫の音
 聞こゆ(十・2015 七夕)
 ②⑪ 相見らく 飽き足らねども いなのめの 明けさりにけり 舟
 出せむ妻(十・2022 七夕)
 ②⑫ 天の川 楫の音聞こゆ 彦星と 織女と 今夜逢ふらしも
 (十・2029 七夕)
 ②⑬ 秋風の 清き夕に 天の川 舟漕ぎ渡る 月人をと(十・2033
 七夕)
 ②⑭ 天の川 霧立ち渡り 彦星の 楫の音聞こゆ 夜の更け行けば
 (十・2044 七夕)
 ②⑮ 君が舟 今漕ぎ来らし 天の川 霧立ち渡る この川の瀬に
 (十・2045 七夕)
 ②⑯ 天の川 川の音清し 彦星の 秋漕ぐ舟の 波の騒きか
 (十・2047 七夕)
 ②⑰ 天の川 八十瀬霧らへり 彦星の 時待つ舟は 今し漕ぐらし
 (十・2053 七夕)
 ②⑱ 風吹きて 川波立ちぬ 引き舟に 渡りも来ませ 夜の更けぬ
 間に(十・2054 七夕)
 ②⑲ 天の川 打橋渡せ 妹が家道 止まず通はむ 時待たずとも
 (十・2056 七夕)
 ②⑳ 年に装ふ 我が舟漕がむ 天の川 風は吹くとも 波立つなゆ
 め(十・2058 七夕)
 ③① 天の川 波は立つとも 我が舟は いざ漕ぎ出でむ 夜の更け
 ぬ間に(十・2059 七夕)

- ④② 天の川 白波高し 我が恋ふる 君が舟出は 今しすらしも
(十・2061 七夕)
- ④③ 機 の 踏み木持ち行きて 天の川 打橋渡す 君が来むため
(十・2062 七夕)
- ④④ 天の川 渡り瀬深み 舟浮けて 漕ぎ来る君が 楫の音聞こゆ
(十・2067 七夕)
- ④⑤ 天の川 なづさひ渡り 君が手も いまだまかねば 夜の更け
ぬらく(十・2071 七夕)
- ④⑥ 渡り守 舟渡せをと 呼ぶ声の 至らねばかも 楫の音のせぬ
(十・2072 七夕)
- ④⑦ 渡り守 舟はや渡せ 一年に 二度通ふ 君にあらなくに
(十・2077 七夕)
- ④⑧ 天の川 棚橋渡せ 織女の い渡らさむに 棚橋渡せ(十・2081
七夕)
- ④⑨ 天の川 去年の渡り瀬 荒れにけり 君が来まさむ 道の知ら
なく(十・2084 七夕)
- ⑤⑩ 天の川 瀬々に白波 高けども 直渡り来ぬ 待たば苦しみ
(十・2085 七夕)
- ⑤① 渡り守 舟出し出でむ 今夜のみ 相見て後は 逢はじめのか
も(十・2087 七夕)
- ⑤② 秋風の 吹きくる夕に 天の川 白波凌ぎ 落ち激つ 早
瀬渡りて 若草の 妻が手まくと 大船の 思ひ頼みて 漕ぎ
来らむ その夫の子が…(十・2089 七夕)
- ⑤③ 彦星の 川瀬を渡る さ小舟の え行きて泊てむ 川津し思ほ
ゆ(十・2091 七夕)
- ⑤④ 紅の 裾漬く川を 中に置きて 我や通はむ 待ちにか待たむ
(十一・2655 一五)
- ⑤⑤ 明日香川 明日も渡らむ 石橋の 遠き心は 思ほえぬかも
- ⑤⑥ はしきやし 逢はぬ君故 いたづらに この川の瀬に 玉裳濡
らしつ(十一・2705)
- ⑤⑦ 鈴鹿川 八十瀬渡りて 誰が故か 夜越えに越えむ 妻もあら
なくに(十二・3156)
- ⑤⑧ あをによし 奈良山過ぎて ものふの 宇治川渡り 娘子ら
に 逢坂山に 手向くさ 幣取り置きて…(十三・3237 雑歌)
- ⑤⑨ 真木積む 泉の川の 早き瀬を 棹さし渡り ちはやぶる
宇治の渡りの 激つ瀬を 見つつ渡りて 近江道の 逢坂山に
手向して 我が越え行けば…(十三・3240 雑歌)
- ⑥⑩ さ丹塗りの 小舟もがも 玉巻きの 小楫もがも 漕ぎ渡
りつつも 語らふ妻を(十三・3299 相聞)
- ⑥① … ぬばたまの 黒馬に乗りて 川の瀬を 七瀬渡りて うら
ぶれて 夫は逢ひきと 人ぞ告げつる(十三・3303 相聞)
- ⑥② 川の瀬の 石踏み渡り ぬばたまの 黒馬の来夜は 常にあら
ぬかも(十三・3313 問答)
- ⑥③ 泉川 渡り瀬深み 我が背子が 旅行き衣 濡れ漬たむかも
(十三・3315 問答)
- ⑥④ 直に行かず こゆ巨勢道から 岩瀬踏み 求めぞ我が来し 恋
ひてすべなみ(十三・3320 問答)
- ⑥⑤ 玉梓の 道行き人は あしひきの 山行き野行き にはたづみ
川行き渡り いさなとり 海道に出でて…(十三・3335/ 挽
歌)
- ⑥⑥ 玉梓の 道に出で立ち あしひきの 野行き山行き にはたづ
み 川行き渡り いさなとり 海道に出でて…(十三・3339
挽歌 見屍作歌)
- ⑥⑦ まかなしみ さ寝に我は行く 鎌倉の 水無瀬川に 潮満つな
むか(十四・3366 相模国歌)

⑥8 信濃なる 千曲の川の 小石も 君し踏みてば 玉と拾はむ

(十四・3400 信濃國歌)

⑥9 利根川の 川瀬も知らず 直渡り 波に遭ふのす 逢へる君かも (十四・3413 上野國歌)

⑦0 青楊の 萌らる川門に 汝を待つと 清水は汲まず 立ち処平すも (十四・3546)

⑦1 夕月夜 影立ち寄り合ひ 天の川 漕ぐ舟人を 見るがともしさ (十五・3658 七夕仰觀天漢、各陳所思作歌)

⑦2 織女し 舟乗りすらし まそ鏡 清き月夜に 雲立ちわたる (十七・3900 十年七月七日之夜、独仰天漢聊述懷 大伴宿祢家持作)

⑦3 鵜坂川 渡る瀬多み この我が馬の 足搔きの水に 衣濡れにけり (十七・4022 婦負郡渡鵜坂河邊時作)

⑦4 立山の 雪し消らしも 延槻の 川の渡り瀬 鏡漬かすも (十七・4024 新川郡渡延槻河時作歌)

⑦5 : 安の川 中に隔てて 向かひ立ち 袖振り交し 息の緒に 嘆かす児ら 渡り守 舟も設けず 橋だにも 渡してあらば その上ゆも い行き渡らし 携はり うながけり居て :

(十八・4125 七夕歌一首并短歌)

⑦6 天の川 橋渡せらば その上ゆも い渡らさむを 秋にあらずとも (十八・4126 七夕歌一首并短歌)

⑦7 秋されば 霧立ち渡る 天の川 石並み置かば 継ぎて見むかも (二十・4310 七夕歌)

以上、渡河をうたう万葉歌と考えられるものを挙げた。煩瑣に亘ったが、全体的に「朝川渡る」を捉えたかったのである。これらの用例では川を渡る主体は、次のように大まかに分類できる。(当該例③を除く。)

(イ) 旅の道中、また遊覧の川渡り

八例 (①、②、⑥、⑤7〜⑤9、⑦3、⑦4)

(ロ) 男が女の許に行くための川渡り (女が恋人の渡るのを待つ場合も含む)

四十七例 (④、⑧、⑩、⑬、⑰、⑲、⑳、㉓、㉔、㉕、㉖、㉗、㉘、㉙、㉚、㉛、㉜、㉝、㉞、㉟、㊱、㊲、㊳、㊴、㊵、㊶、㊷、㊸、㊹、㊺、㊻、㊼、㊽、㊾、㊿)

(ハ) 女の川渡り

七例 (⑨、⑫、⑮、⑳、㉔、㉕、㉖)

(ニ) 死出の川渡り

四例 (⑤、⑦、⑱、㉖)

(ホ) 鳥獸の川渡り

一例 (⑪)

(ヘ) その他 (渡河の主体の性別の判定が困難な例)

九例 (⑭、⑯、⑳、㉑、㉒、㉓、㉔、㉕、㉖)

(ロ) 男が女の許に行くための「川渡り」が圧倒的に多い。大久間論文が説くように、多くの場合、川を渡ることが恋の成就と関連することは、確かであると思う。また、「渡河」の歌では、七夕歌が多く(三十六例)、ここに挙げた例の約半数を占めることも、その特徴の一つであろう。そして、こうした例の中で、女性の川渡りが、非常に少ないこともまた明らかである。恋の成就をめざす渡河は、原則として男の行為であったと言える。

女の川渡りの確例は七例。七夕歌の織女を除けば、わずかに四例である。⑨は、紀女郎の怨恨歌三首のうちの第一首。この「痛背あなせの川を渡る」の解釈にも諸説があるが、ここでは論じない。しかし、川渡りを比喩的に歌っていることは間違いないとされる。⑫の歌は、男と共に川を渡る女の歌。川瀬の流れが速いからと、あなたの手を取ったら噂されるだろうか、と詠う。女が男の手を取って川を

渡ることが仮定されている。⑤は、高橋虫麻呂歌集の歌かと言われ
るもの。題詞から、一人の娘子が橋を渡っていることが明らかであ
る。旅中に見かけた女性だろうか。虫麻呂の孤愁も感じられる歌で
あるが、この娘子の川渡りの意図、意味は判然としない。④は、卷
十一、2655番歌「紅の 裾引く道を 中に置きて 我や通はむ 君
か来まさむ」の「一云」歌で、川を間に置いて、私が通おうか、あ
なたが来るのを待とうかと詠う。ここでは、恋の成就のための川渡
りが、女性によつてもなされるようにも解釈できる。しかし、ある
いは卷二冒頭の磐姫の歌の「迎えか行かむ 待ちにか待たむ」のよ
うに、実際にはありえない選択肢を述べて恋の想いの深さを訴えて
いるのかもしれない。

このように見てくると、女が川を渡るとは、万葉にあつて稀少
な例であることがわかる。当該歌で「おのが世に いまだ渡らぬ」
と強調されていることも頷ける。しかし、この希少な例は、それぞ
れが異なる川渡りであり、ここから「朝川渡る」の解釈を導き出す
ことは難しい。ともあれ、女の川渡りに恋の成就を読みとることは、
用例からでは困難であると言えよう。

もう一つ、葬送時の川渡りがある。⑤は人麻呂の吉備津采女の挽
歌であり、⑦は、坂上郎女が尼理願の死に臨んで詠んだもの。例⑥、
⑥は、「あしひきの 山行き野行き にはたづみ 川行き渡り」の
詞章が類似しているが、あきらかに⑤、⑦の例とは異なる。⑤、⑦
が吉備津采女、尼理願の死後の道行きであるのに対して、⑥、⑥の
例では、死者の生前の旅の様子を述べていて、むしろ羈旅中の川渡
りと言え、(イ)に分類してもいい例かもしれない。そうすると、
死後の川渡りの例は女性のみ二例となり、生きている女性の川渡
りが少ないのに反して奇妙な分布状況とも言えそうだ。何故だろう
か。いずれにせよ、二例という少なさは、何とも言い得ない。し
かし、女性の川渡りは稀なことであり、死んではじめて渡ることも

あるという解釈の可能性はあるかもしれない⑤。

三 「朝川」

この歌に歌われる「朝川」については、朝という時間の川である
とする解釈と、浅い川であるとする解釈の二つがある。「浅川」と
する場合、「朝」は「浅」の借訓ということになる。集中、「朝川」
の用例はあるが(挙例一 ①、⑦)、「浅川」はない。また、岡内論
文が指摘しているように、「浅」の借訓として「朝」を当てた例は
ない。ここは「朝」という時間の川と取るべきであろう。

「朝」についての解説は、稲岡耕二『全注』に詳しい。また、伊
藤博『釈注』は、「男女が逢つて別れる時である」と指摘する。万
葉集の歌における「朝」は、夜が終わって昼が始まる時であり、ま
た「夕」は昼が終わって夜が始まる時である⑥。恋人たちの時間
である夜が終わるときが「朝」ならば、「朝川渡る」を逢瀬の帰路と
する解釈は、整合性の高いものと言えよう。また、卷二冒頭部の磐
之姫歌群も「秋の田の 穂の上に霧らふ 朝霞…」という第四首で
終わる。

夜の終わる「朝」は、恋物語の終息も意味したのであろう。但馬
皇女の歌群でも、思いは募り、逢瀬の夜を経て、朝の終焉が語られ
ていると読めるように思う。

四 「人言を 繁み言痛み」

もう少し解釈を前進させるために、この句が一首の中ではどのよ
うに機能しているのか、当該歌の第一句、二句を参考にして考えた
い。第一句、二句「人言を繁み 言痛み」は、「繁し」「言痛し」の
ミ語法であるとされる。「人言を繁み言痛み」と、同様の意味を持
つ「人言繁し」「言痛し」のミ語法の万葉集中の使用例を見、その
用例の検討をしたい。

○万葉集中の「人言、言、人目―繁み」・「言痛み」

1. (当該) 人言を 繁み言痛み 己が世に いまだ渡らぬ 朝川
渡る (二・116)
2. 人言を 繁み言痛み 逢はずありき 心あること な思ひ我が
背子 (四・538 高田女王贈今城王歌六首)
3. うつせみの 人目を繁み 石橋の 間近き君に 恋ひわたるか
も (四・597 笠女郎贈大伴宿祢家持歌廿四首)
4. 人言を 繁みか君が 二鞘の 家を隔てて 恋ひつつまさむ
(四・685 大伴坂上郎女歌七首)
5. 恋ひ死なむ 所も同じぞ 何せむに 人目人言 言痛み我が
せむ (四・748 更大伴宿祢家持贈坂上大嬢歌十五首)
6. 言繁み 君は来まさず 霍公鳥 汝れだに來鳴け 朝戸開かむ
(八・1499 大伴四繩宴吟歌一首)
7. 垣ほなす 人の横言 繁みかも 逢はぬ日数多く 月の経ぬら
む (九・1793 思娘子作歌一首「并短歌」反歌)
8. 旅にすら 紐解くものを 言繁み まろ寝ぞ我がする 長きこ
の夜を (十・2305 問答)
9. 人言を 繁みと君に 玉梓の 使も遣らず 忘ると思ふな
(十一・2586 正述心緒 作者未詳)
10. 人言を 繁みと君を 鶉鳴く 人の古家に 語らひて遣りつ
(十一・2799 寄物陳思 作者未詳)
11. 人言を 繁み言痛み 我妹子に 去にし月より いまだ逢はぬ
かも (十一・2895 正述心緒 作者未詳)
12. ただ今日も 君には逢はめど 人言を 繁み逢はずて 恋ひわ
たるかも (十一・2923 正述心緒 作者未詳)
13. 心には 燃えて思へど うつせみの 人目を繁み 妹に逢はぬ
かも (十一・2932 正述心緒 作者未詳)

14. 人言を 繁み言痛み 我が背子を 目には見れども 逢ふよし
もなし (十一・2938 正述心緒 作者未詳)

15. 人言を 繁みと妹に 逢はずして 心のうちに 恋ふるこのこ
ろ (十二・2944 正述心緒 作者未詳)

16. うつせみの 人目を繁み 逢はずして 年の経ぬれば 生けり
ともなし (十二・3107 問答歌 作者未詳)

17. 言繁み 相問はなくに 梅の花 雪にしをれて うつろはむか
も (十九・4282 五年正月四日於治部少輔石上朝臣宅嗣家宴歌
三首)

当該例を除外して、他十六例を見るとこの「人言・人目繁み」「言
痛み」が原因・理由として惹き起こされる事態は、男女が逢わな
くならないこと限定されていることがわかる。なかには、「恋ふ」
「来ない」「使いも遣らない」などの表現もあるが、どれも、心
中では恋ひ慕っているのに、他人の言葉を憚り、自重して逢わない
(逢えない) という意味で使われており例外がない。これと類似の
例と考えられる「人目多み」についても、その集中の全用例を引い
てみる。

○万葉集中の「人目(を)多み」

ア. やまず行かば 人目を多み 数多く行かば 人知りぬべみ

さね葛 後も逢はむと 大船の 思ひ頼みて 玉かぎる 岩垣

淵の 隠りのみ 恋ひつつあるに … (二・207 柿本朝臣人

麻呂妻死之後泣血哀慟作歌二首并短歌)

イ. 人目多み 逢はなくのみぞ 心さへ 妹を忘れて 我が思はな

くに (四・770 大伴宿祢家持従久邇京贈坂上大嬢歌五首)

ウ. 木綿懸けて 祭る三諸の 神さびて 斎むにはあらず 人目多

みこそ (七・1377 寄神)

エ. 息の緒に 我れは思へど 人目多みこそ 吹く風に あらばし

ばしば 逢ふべきものを (十一・2359)

オ. 人目多み 常かくのみし さもらはば いづれの時か 我が恋
ひずあらむ (十一・2606)

カ. 心には 千重に百重に 思へれど 人目を多み 妹に逢はぬか
も (十一・2910)

キ. 人目多み 目こそ忍ぶれ すくなくも 心のうちに 我が思は
なくに (十一・2911)

ク. 人目多み 直には逢はず 夢にだに やまず見えこそ 我が恋
やまむ (十一・2958 或本歌頭云)

ケ. 逢はむとは 千度思へど あり通ふ 人目を多み 恋つつぞ居
る (十一・3104)

コ. 人目多み 直に逢はず けだしくも 我が恋ひ死なば 誰が
名ならむも (十一・3105)

サ. 草枕 旅行く君を 人目多み 袖振らずして あまた悔しも
(十一・3184)

シ. 梓弓 末は寄り寝む まさかこそ 人目を多み 汝をはしに置
けれ (十四・3490 柿本朝臣人麻呂歌集出也)

以上の例で、「人目(を)多み」も、心のうちでは恋うているが、
人目を憚って逢わない、もしくは親しい様子を見せないということ
を語る句であるということがわかる。

万葉人にとって「人言繁き」また「人目」に立つ状況は、現代の
私たちが「噂を憚る」という言葉で捉えるより、ずっと忌々しい事
態であったようである。言葉が今よりもはるかに大きな力と意味を
持っていた時代にあつては、そうした時、愛する相手のためにも自
重しなければならなかったのであろう。そのようにしか読めない歌
が多い。

これら「人言繁み・言痛み」「人目多み」の例から考えれば、但

馬皇女の「朝川渡る」は、心に穂積皇子を恋慕しているけれども、
今は人言を憚って彼に逢えない事情を表現しているものと解すべき
ではないか。

当該歌の「人言を繁み言痛み」が、「いまだ渡らぬ」にかかるの
であつて、「朝川渡る」にかかるのではない、という説²⁾もある。
けれども「いまだ渡らぬ」は「朝川」を修飾する連体形であり、前
記の「人言繁み・言痛み」「人目多み」の用例中にもそういう語に
かかる例は見出せない。したがつてこの解釈には無理があると思わ
れる。「人言を繁み言痛み」は、「朝川渡る」にかかるものとし、他
人の言葉を憚つてとつた行動は「朝川渡る」であるとしなければな
らないだろう。

従つて、用例から推して考えれば、「朝川渡る」には、穂積皇子
に逢わないという行動が意味されている蓋然性が高い。

五 題詞との関連

巻二のいわゆる連作歌群において、題詞は、その連作の表す歌物
語にとつて大きな意味を持つ。これは、これまでの万葉研究が明ら
かにしてきたことである。当該一六番歌を含む三首の歌も例外で
はない。三首の題詞は、それぞれの歌の内容を示唆し、歌は題詞の
内容を踏まえて詠まれている。

一首目は、但馬皇女が高市皇子の宮にいながら穂積皇子を思うこ
とが題詞で語られ、歌は、その踏み込んではいけない恋の道に、た
とえ人の言葉が痛くても踏み込みたいと詠う。第二首の題詞では、
志賀の山寺に派遣される穂積が題詞で説明され、それに対して後を
追おうとする皇女の強い意志が歌われる。そして、この第三首も、
二人の逢瀬が「形はれて」詠まれる。「形」は『広雅』や『國語』の「注」
に「見也」とあり、「あらわす・あらわされる」という意味である。
ここは、大津皇子のように、占いで顕されたものでなく、何らかの

手段でその事実があらわされてしまったという想定であろう。そういう事態を受けての歌であるということ、確認しておきたい。この場合、歌は題詞の内容をなぞるのではなく、第一首、第二首のように題詞の内容を受けての行為を表すとするのが穏当である。

二人の密会は、高市皇子の宮の人々に知られた。忌忌しい人言が飛び交う。これが原因となって皇女は朝川を渡るのである。その朝川は、「おのが世にまだ渡らぬ」ものであった。

六 試解

ここまで、調査、考察してきたことをもとに解釈を試みたい。

皇女但馬は、高市皇子の宮にいなながら穂積皇子を恋し、やがてその逢瀬は露見した。口さがない宮人たちの言葉を憚って、皇女はこれまで渡ったこともない朝の川を渡る。朝は恋の終わるときであり、これは、愛しい穂積皇子とも逢わないという意志をあらわしており、穂積への恋心を表明し、また男女の関係へと踏みこんだ皇女の、これまでの行動の中にはあり得なかつた川渡りなのだ。

三首全体で見るとき、一首目は、「君に寄りなな」という願いがうたわれ、恋の始まりを告げる。二首目は、激しく燃える想いを訴える。遠く離れる「我が背」に「追ひ及かむ」という強い意志と「標結へ」という命令形は、まぶしいばかりの恋の言辞だ。人麻呂の石見相聞歌の「妹が門見む」「なびけこの山」という激しい恋情が想起される。三首目では、逢瀬が発覚して後の終息。激しく燃える恋は、多くの「人言」を招き、皇女は、朝の川を渡って行く。「君に寄りなな」、「追ひ及かむ」と未来を指向していた言葉は、もはや使われない。「渡る」という現在の皇女がうたわれる。まるで恋の挫折をうたうかのようなこの歌は、それにもかかわらず美しいと思う。この歌の美しさは、こういった状況を悔いることなく、頭を挙げて受け入れているかのような皇女の潔さが、この飾り気のない終

止形の「渡る」に表れているからではないだろうか。

この三首のどの歌にも、自己の意思を貫く皇女の姿がうかがわれる。第三首には、人言によって川渡りを強いられたとする解釈もあるが、先に引いた「人言」「人目」の歌々では、これを避けて逢わないほうがいいという判断は、すべて恋愛の当事者によってなされている。ここでも、人言を今は避けるべきだという判断は、皇女自身によってなされたと読める。それは、この人生で「いまだ」経験したことのないつらい決断であるが、それを自己の意志と責任において実行する皇女の姿が、「渡る」に表現されていると思う。この三首は、独白に似てどんな返答の和歌も必要としていないかのよう

だ。なお、忘れてはならないことは、先に例として引いた「人言」「人目」の歌は、すべて、心には燃えるように恋い慕いながら「人目、人言」によって今は逢わないという意味を持つことである。すなわち、それは「人言、人目」が収まれば、また「逢う」ことをも意味する。人麻呂の泣血哀慟歌が、「人目を多み……後逢はむ」とうたうように、皇女の歌も「人言を繁み言痛み」今は逢わないけれど、やがて、きつと……という含みを持つと読み解くことができる。二人はその後どうなったのか。藤原宮跡から出土した木簡の中に「多治麻内親王宮」とあって、皇女が独立して宮を営んだことは知られているが、二人の恋の行く末はどこにも語られていない。けれども、どのような形であれ、二人はやがて強く結ばれていったものと思われる。穂積皇子が但馬皇女の死後に残した挽歌は、何よりもそれを語っていよう。

【注】

(1) 本稿での万葉集の引用は、小学館『新編日本古典文学全集 万葉集』による。

- (2) 大久間論文では、「朝川渡る」を恋人に逢いに行くための行為にとらえ、「川渡り」に「恋の成就」という意味を認めている。
- (3) 『新潮古典集成』では、「未明の川を渡って逢いに行く」と解釈しつつ『川を渡る』のは女が恋の成就を願う行為」というふうな実際の行動の背景に寓意を読みとる。
- (4) この分類では、大きく比喩と実際の渡河と分けたが、解釈の中には実際の渡河の中に寓意を含むとしているものもある。
- (5) なお、前記用例中の④は、長皇子が皇弟に与えた歌という題詞を持つが、女性の立場で「我が背」が来るのを待つという内容であるため(ロ)に分類した。また、⑥の渡河は、突然の出会いを表わすための比喩とされており、⑦、⑧～⑩は七夕歌であるが、いずれも渡る主体の性別が明らかでないため、(へ)に分類した。
- (6) 拙稿「万葉集の夜と昼」『東アジアの古代文化』108号(2001年 大和書房 寺田恵子名で執筆)。
- (7) 大久間喜一郎「川を渡る女」、稲岡耕二『万葉集全注 卷二』(昭和六十年)、身崎寿「一一六番歌解説」『セミナー万葉の歌と作品 第十二巻』(平成十七年 和泉書院)